

冬の直まき 広がる実践

初冬にコメの種もみを直接まく本県発の栽培技術が、県内外でじわりと広がっている。岩手農学部の下野裕之教授(作物学)が中心となつて普及に励む栽培法で、農閑期に種をまくため農家の負担が軽減できる。研究着手から15年余。持続可能な農業を目指して技術開発を進め、問い合わせや活用例が増えてきた。

岩手大・下野教授ら研究15年



講習会で岩手発の初冬直まき技術を学ぶ県内外の農業関係者

県内外30人がコメ栽培 問い合わせも増

直まき栽培は育てた苗を水田に移植する一般的な方法に対し、田んぼに直接種をまく。春の直まきは全国で例があるが、初冬は新しい。繁忙期となる春の作業を避けられるほか、育苗や移植にかかるコスト、作業時間を短縮できる。秋の収穫は変わらない。

下野教授(49)が2008年から研究を始め、18年度に生物系特定産業技術研究支援センターの事業に採択。実用化に向けて6カ年で3億円の支援を受けた。全国の研究機関と連携して、地域の気象や土壌に適した栽培手法の研究を進め▽種子消毒剤で種子をコーティング▽種まきの深度は1〜2センチが望ましい—など精度を高めてきた。

花巻市で23日に開かれた講習会には、県内外の生産者ら約40人が参加。農協関係者らが昨年10〜11月にひとめぼれの種をまいた実験圃場で見学した。

宮城県大郷町の農業村田和良さん(64)は「順調に生育していることに驚いた。挑戦したい」と関心を寄せ、福島県猪苗代町の農業長谷川富夫さん(77)は「春先は農作業が立て込むが、冬は時間がある。知らない技術だったが、地元の仲間と勉強したい」と意欲を示した。

現時点で県内外の約30人が栽培に取り組み、問い合わせも増えている。さまざまな地域や品種への対応が課題で、引き続き技術改良を進める。

下野教授は「従来の田植えや春の直まきと合わせ、農家の選択肢を広げることで経営の安定化につなげたい。コメ栽培の作業省力化で野菜や花卉などの作物に注力することもできる。10年、20年先も持続可能な農業にしたい」と語る。

※岩手日報 令和5年6月29日付/4面
 ※この記事は岩手日報社の許諾を得て転載しています。